

## MoMAとbrowngrotta artsを訪れて 福田笑子

### MoMA 「Woven Histories: Textiles and Modern Abstraction」 （ニューヨーク）

2025年5月2日、朝10時半の開館と同時にMoMAへ。お目当ては「織られた歴史：織物と現代抽象芸術」という展覧会。タイトルの通り、織物と抽象表現がどう関わってきたかを探る内容で、織物、バスケットリー、衣服、絵画、映像など、約150点が展示されていました。

展示は20世紀初頭から現代までをカバーしており、織物における素材や技法が抽象芸術の流れとどのように関係してきたのかをたどる構成でした。Anni Albers、Sonia Delaunay、Sophie Taeuber-Arp、Ruth Asawa、草間彌生など、時代も国も異なる作家たちの作品が並び、それぞれが織物という表現とどのように向き合ってきたのかに関心を持ちました。同時に、この多様な作品群がどのような視点や文脈によって選ばれたのか、そのキュレーションの意図にも興味を惹かれました。

中でも心に残ったのはEd Rossbachの作品。バスケットリーや織りの技法を使った10点ほどの作品には、「灰」「ラッカー」「和紙」「新聞紙」「木片」「荷造りひも」「ラフィア」「シルクスクリーンの紙」「綿」「ポリエステル」「プラスチック」「紙」「シリコン」「市販の布地」など、身近ながら意外な素材が多く使われており、それらがどのように作品に活かされているのかを探るたびに新たな発見があり、つい見入ってしまいました。

また、Ed Rossbachの作品には謎解きのようなおもしろさがあります。伝統的な技法と意外な素材がただ置き換えられているのではなく、「織る」「編む」といった行為そのものが表現になっている点に惹かれました。

たとえば、《Reconstituted Commercial Textile》という作品では、一見ふつうの織物のように見えるものの、近づくと透明なシートの中に縞模様の布が挟まれ、左右で模様の向きが異なることに気づきます。その構造をどのように解釈すべきか、立ち止まって考えさせられました。各作品には、織物や籠の仕組みをユーモラスに分解・再構築するような実験的な要素が見られ、実際に作品を前にして初めて気づく発見がいくつもありました。理解できたようでいて、その先に謎が潜んでいるような感覚もあり、ひとつひとつの作品が思考を深めるきっかけを与えてくれるようでした。

他の作家の作品にも、衣服や籠の形から着想を得たものや、空間に浮かぶように展示されたものなど、「織物＝布」という固定観念を超えて、技法や概念としての織りを感じさせる表現が多く見られました。繊維芸術の可能性の広がりや、あらためて実感する展示でした。

### ニューヨークからbrowngrotta artsへ

MoMAでの約1時間半の滞在を終え、徒歩でグランドセントラル駅へ。駅構内で軽く昼食を済ませた後、コネチカット州ウィルトン行きの電車に乗り込みました。同じ電車には、今回の出展作家であるポーランド出身のWłodzimierz Cyganさんとそのご親戚である15歳の少女Victoriaさんの姿も。約1時間半でウィルトン駅に到着。駅には

browngrotta artsのオーナーであるTomさんが車で迎えに来てくださり、ギャラリーへ向かいました。

browngrotta artsは、ニューヨーク郊外の静かな住宅地にある一軒家のギャラリーです。もとは納屋だった建物を改装したその空間は、まるで誰かの家に作品を見に来たかのような、居心地のよさを感じました。

今回ありがたいことに、ギャラリーに併設されたゲストルームに宿泊させていただきました。到着後すぐに部屋へ案内され、その後ギャラリー内を巡りながら、展示作品や空間構成について丁寧に説明を受けました。仕切りのない複数の部屋に100点を超える作品が展示され、階段を上るとまた別の空間が広がっている構成は、作品との距離がとても近く、開放感がありながらも親密な空間でした。今回は主に1階が展示会場でしたが、2階にも多くの作品が展示されており、あわせて紹介してもらいました。また、カタログなどの出版物の制作に関わるオフィスや作業スペースも見学することができ、とても貴重な経験になりました。さらに、新しく作られたプールや広々とした庭にも案内してもらい、そのスケールに驚かされました。

とりわけ印象的だったのは、展示空間への細やかな配慮です。たとえば、展示金具が見えないよう天井部分に工夫が施されていたり、壁面作品が壁から少し浮かせて設置されていたり、と空間と作品のバランスを大切にした繊細な設計が随所に見られました。お話によると、展示に使われている金具はドイツ製などで、普段目にするものがない特別なものが多く、金具やキャプション、ライティングに至るまで、美しさと機能性の両立が徹底されており、空間全体が

作品の魅力を最大限に引き立てるよう設計されていることに感銘を受けました。

## 展覧会概要

(ギャラリーのウェブサイトより抜粋・引用)

「Field Notes: an art survey」は、2025年5月3日から11日まで、コネチカット州ウィルトンにあるbrowngrotta artsにて開催。世界各地、異なる世代の52人のアーティストの作品を集め、それぞれのアプローチや影響、情熱、そして実践を紹介しています。ファイバーアートは、現代のアートシーンにおいて、物語性と革新性をあわせ持つ力強い表現手段です。本展では、browngrotta artsにとって初の参加となる6名のアーティスト、Sophie Rowley、Yong Joo Kim、Ane Lynsgaard、Sun Rim Park、Jennifer Zurick、中平美紗子が招待されています。彼女たちはいずれもテキスタイルの技法を基盤にしながら、独自の素材やアプローチで新たな表現を切り開いています。

加えて、Sheila Hicks、Ed Rossbach、Marianne Rousseau-Vermette、Kay Sekimachi、小林正和という、ファイバーアートの黎明期を支えた5人の先駆的なアーティストの選定作品も展示されています。今から約60年前、アーティストたちは従来のテキスタイルの枠を超えた表現に取り組み始めました。伝統的な技法を活かしつつも、金属や鉱物をはじめとする多様な素材を、天然繊維や合成繊維と組み合わせることで、テキスタイルは平面から立体へ、そして空間へと拡張していきました。今回紹介されている5人の作家は、1960～70年代における現代ファイバーアートの誕生において重要な役割を果たしただけでな

く、今日に至るこの分野の発展と人気の高まりにおいても、欠かすことのできない存在です。

## オープニングとアーティストレセプション

5月3日のオープニングには、多くの来場者が訪れ、会場は大変賑わいました。展示は、エントランスホールやダイニングルーム、リビング、キッチンなど広々としたギャラリーのさまざまな場所に工夫を凝らして配置されており、それぞれの空間にふさわしい形で作品が展示されています。来場者は作品のリストを手に会場内を巡りながら、ひとつひとつの作品を探して鑑賞するプロセス自体を楽しんでいる様子でした。

私は今回4点の作品を出展。それぞれの作品について多くの方が声をかけてくださり、関心を持っていただけたことは、とても印象的でした。会場には美味しい飲み物や軽食も用意されており、終始リラックスした、心地よい雰囲気の中でレセプションが行われました。

## 作家たちとの出会いを通して

5月3日のアーティストレセプションでは、Blair Tate、Kari Lønning、Christine Joy、Norma Minkowitz、Wendy Wahl、Włodzimierz Cyganといった出展作家の皆さんと直接お話しする機会に恵まれました。Christine Joyさんからは、かつて関島寿子さんがHaystack Mountain School of Craftsで講師を務められた際、ご自身がアシスタントをされたときの思い出をうかがい、Kari Lønningさんとは、アケビという素材の特性や魅力についてお話しすることができました。Norma Minkowitzさんに

は、1999年に横浜美術館で開催された

「Weaving the World」展で初めて作品を拝見し、その際の印象が今も深く心に残っていることをお伝えすることができ、感慨深いひとときとなりました。

作家ご本人から、それぞれの表現に込められた背景や技法について直接お話を聞くことができたことは、とても貴重な体験でした。同じ作家による異なる年代の作品が並ぶ展示も多く、それぞれの作品における素材の選択や技法の変化、テーマの移り変わりを通じて、各作家の表現の広がりや世界観に触れることができました。

## ギャラリーでの時間を振り返って

滞在中はTomさんとRhondaさん、そしてギャラリースタッフの皆さんがあたたかく迎えてくださり、作家同士の食事会をはじめ、さまざまな交流の機会に恵まれました。来場者への対応や展示運営の様子を間近で見ると、この展示がいかに丁寧な準備と細やかな配慮の積み重ねによって成り立っているかを実感しました。

朝には、広々とした庭に出て鳥のさえずりを聞きながらゆっくりと朝食をとる時間が、心に残っています。Tomさんが淹れてくださったシナモンの香るカフェオレに、ベーグルとクリームチーズ、サーモンやイクラのディップ、チョコレートケーキやメロンまで、どれも美味しくて贅沢な朝でした。ギャラリーには「キャッシディ」という名の可愛らしい犬がいて、来客があるたびに真っ先に知らせてくれる、頼もしい存在でした。このような豊かな時間を過ごせたことに、心より感謝しています。

(ふくだしょうこ FUKUDA Shoko)

## 展覧会情報

**MoMA: The Museum of Modern Art**  
(ニューヨーク近代美術館)

**「Woven Histories: Textiles and Modern Abstraction」**

2025年4月20日から9月13日まで

カタログ: Amazonにて購入可能

**browngrotta arts**

276 Ridgefield Rd Wilton,  
CT 06897 USA

**「Field Notes: an art survey」**

2025年5月3日から11日まで

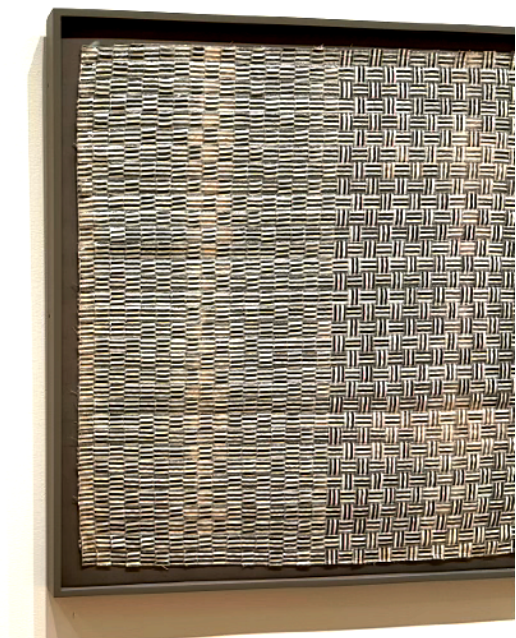
カタログ: [store.browngrotta.com](https://store.browngrotta.com)より

購入可能



Ed Rossbach  
《Constructed Color Wall Hanging》  
1965年 合成ラフィア

**MoMA 「Woven Histories: Textiles and Modern Abstraction」**

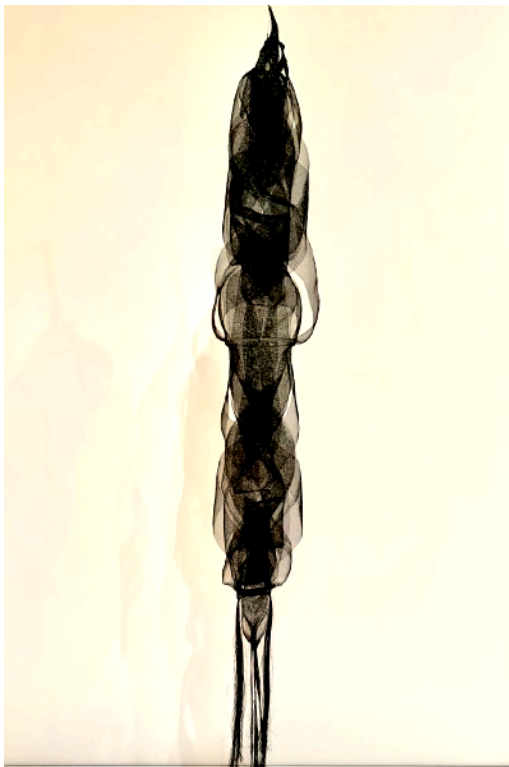


Ed Rossbach  
《Reconstituted Commercial Textile》  
1960年 綿、ポリエチレン

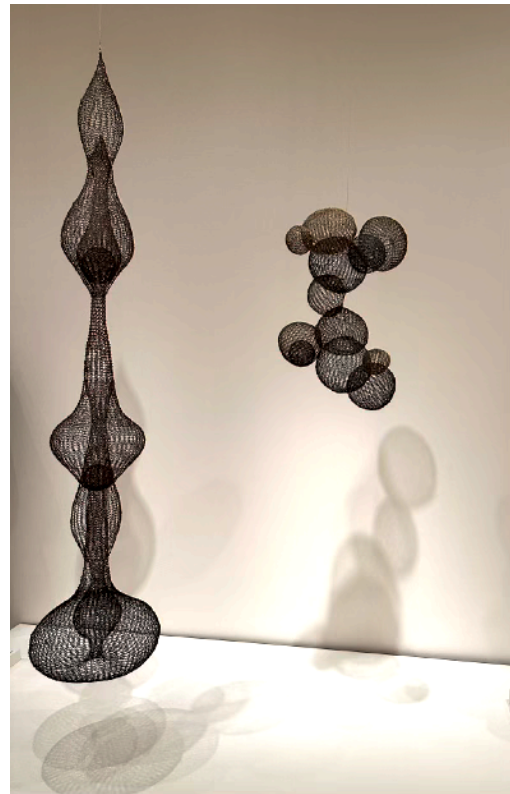




Ed Rossbach バスケットリーの数々

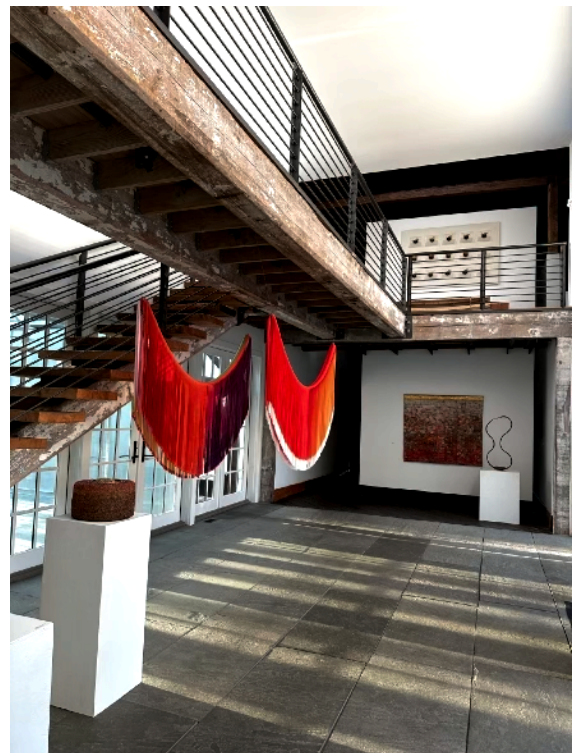


Kay Sekimachi 《Nagare III》  
1968年 ナイロンモノフィラメント



Ruth Asawa  
Untitled (S.089, Hanging Asymmetrical Twelve  
Interlocking Bubbles) 1957年  
亜鉛メッキ鋼、真鍮、鉄線

**browngrotta arts**  
「Field Notes : an art survey」



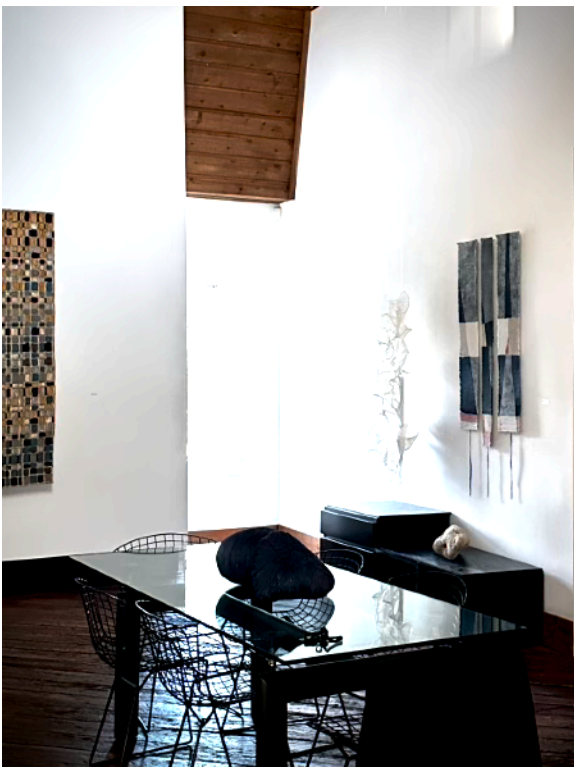
右からJiro Yonezawa, Jin-Sook So (1F & 2F),  
Grethe Whittrock, Norma Minkowitz



右からChristine Joy, Jennifer Zurick,  
Misako Nakahira, Hisako Sekijima,  
Jennifer Falck Linseen



右からAnneke Klein, Noriko Takamiya,  
Young-ok Shin, Pat Campbell



右からCaroline Bartlett, Noriko Takamiya,  
Shoko Fukuda, Sheila Hicks, María Dávila  
Eduardo and Portillo



ギャラリーのお庭で。右からTomとRhonda  
(browngrotta arts), Włodzimierz Cygan